えんちょう先生の わくわくだより

NO.3　H29. 4. 26



春の自然はこども達の



遊びの宝庫だね！

平成３０年から施行される新保育指針に伴ない、変わっていくこども園保育. 教育要領には、乳幼児期の遊びの大切さが強く打ち出されてきます。今迄も勿論そうでしたが、こども達の体や心の発達を危惧する現代、もう一度、こどもの遊びの捉え方を私達大人が見直し、確認する時代にも来ているのだと思います。先日、年長組のK君とテントウムシ捜しをした時の事です。捕まえたテントウムシを一匹、虫篭に入れていたK君だったので、「このテントウムシどこにいたのかな？」K「あっちだよ　畑のそばの草の中」保「じゃあいってみよう　まだこのテントウムシの友達がいるかもしれないね」そんな話をしながら、先に見つけたと言う草むらへ一緒に向かいました。歩きながらK「いないねえ～」保「じゃあ、じっくり落ち着いて座って捜してみようか？」・・と、保「あ！これ何？」。とっさに手を出し、つかもうとしたK君、ころりと落ちて草むらに紛れてしまったテントウムシを指先で丁寧に探します。ニコニコしながら、やっと見つけたテントウムシを虫篭に入れ、「先生、黄色いテントウムシもいるよ。黄色いのは葉っぱのカビを食べてくれるんだよ」保「そうか、先生はナナホシテントウだけがいいテントウムシかと思っとったよ」・・ついでに取ったタンポポの白い綿毛を見せるK君に「たんぽぽのおばあちゃんかね？遠くまで飛んでいって又、たんぽぽが咲くね」に、にっこり。中から、一本の綿毛を抜いて、「種が落ちないようにしっかりついてる」・・とみせてくれました。５匹のテントウムシを捜して満足気なK君。「水分がないと死んじゃうで、草を濡らして入れてやろうか」と声を掛けると、握り締めた草を水道で濡らしに走ったK君でした。・・・こどもって、何をやる時も、いろんな事を考え、こんな遊びのひと時が、大事な学びの時間なんだなあと思ったものです。こどもが遊びを通して育てるものは、運動能力や、丈夫な体だけではありません。「見たり、聞いたり、触ったり、味わったり、臭いを嗅いでみたり・・」こうした五感を育てる事が、やがては、やる気. 集中力. 社交性. 協調性. や工夫する力、など生きていく為の基礎力になっていくのです。こうした身体力は、急に付くものではなく、こどもの頃の様々な体験や、自由な遊びの時間の中で培われていくものですね。「こどものやる事には訳がある」・・を大事に、「いっぱい遊んでおいで」と散歩に出掛けるこども達を送り出す毎日です。春の野原は、つくしにたんぽぽ、ヨモギやすずめのやりなど、様々な草花と動きまわる虫、こども達には楽しい遊びの宝庫です。

絵本は、こどもの心を育てます。

今年度は、絵本の貸出日をちょっと変えてみました。「返って、土日の方が読んでやれない」との声もありましたし、仕事をされているお父さんやお母さんには、少し長い期間があったほうがいいのでは・・との思いからです。絵本は、こども達を見た事もない国に連れて行ってくれたり、ファンタジィーの世界へも誘ってくれたりします。こどもの頃、お父さんやお母さんに読んで貰った絵本は、ずーと こどもの心に残り、成長の糧となりますね。乳幼児期には、テレビやゲームでなく絵本を！



絵本で伝わる 保育・子育てのエッセンス 46

自分らしさを生かす希望持つ

今回は、名作「ぐるんぱのようちえん」（西内ミナミ・作　堀内誠一・絵、福音館書店）＝写真。

ゾウの「ぐるんぱ」は、独りぼっちで寂しく育ってきました。そのため体も臭く、いつもめそめそし、仕事もしなかったのです。それをゾウの仲間は問題にし、彼をきれい洗ってやり、仕事を探す旅に出させたのです。

彼は見違えるほど元気になってしまうのです。

その旅の中で出会ったのが、12人の子どもがいる家族。その母親から「こどもと　あそんでやってくださいな」と頼まれました。そこで、「ぐるんぱ」は良さを発揮し始めるのです。子どもたちから大人気。これまでていた小学校の教師になりたいという夢を捨てきれず、仕事をしながら夜間の大学に通いました。

でも、失敗ばかり。職場ではミスが多く、毎日のように叱られました。大学でも小学校の教員への希望が抱けず、何をやってもうまくいかない自分が嫌になり、気持ちは落胆していったのです。

その時に出合ったのが、履修する予定のなかった大学の幼児教育の授業でした。それは、私がこれまで出合ってきた「教育」の考えとは違うものでした。「子どもは遊びの中で、主体的に人生で大事なことを学んでいる」ということ、「子どもがしていることには意味があり、それを肯定的に捉えていくこと」など、衝撃の連続でした。

その後、さまざまな園で子どもに関わるようになり、心が踊る経験をしました。そして、幼稚園の現場で働きたいと思うようになり、現在の自分があります。

まさに、私自身が「ぐるんぱ」そのものだったと思います。自分が能力のない劣った存在であると思い、絶望的になることがあっても、自分らしさを生かせる場があると希望を持ち続けることが大切なのです。この本を読むたびに、そう思わせられます。

大豆生田 啓友
玉川大学院教授